

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2015年9月発行～

ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291
Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

発行日 平成 27 年 9 月 11 日
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会
編集 相坂政夫

No.45



秋の気配が濃くなってまいりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。玉木宏樹が永眠してから早 3 年半が過ぎました。純正律を愛し追求しつづけた玉木の後を継ぎ、純正律音楽研究会は純正律の普及に努力いたしておりますが、未だ皆様方に認知されるまでには至っておりません。これからも今まで以上に各地でコンサート等開催し、会員の皆様と共に純正律の普及に邁進していきたいと思っております。ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

さて、8 月 28 日科学技術館サイエンスホールでのコンサートは満席の盛況で多くの方々に、今までにない感動の拍手をいただきました。ありがとうございました。

今後のコンサートは、10 月 23 日長野県岡谷市岡谷文化会館カノラホールと、12 月 23 日東京新宿文化センター小ホールになります。

教えることの難しさ

洗足音楽大学教授・ヴァイオリニスト
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表
水野佐知香

残暑厳しきと申し上げたいのですが、あっという間に秋、梨、ブドウ、桃などの果物、サンマ、栗など美味しい季節がやってきました。会員の皆様いかがお過ごしでいらっしゃいますか？

さて私は今、深夜0時半に羽田を飛びドバイで乗り継ぎをして、ハンガリーのブタペストへ向かう機上の人となっています。昨年、洗足学園のマスタークラスにいらしたリスト室内管弦楽団の先生方がご好意で、ブタペストの彼らの本拠地でのマスタークラスとコンサートを企画してくださり学部生から大学院生までヴァイオリン21人、ヴィオラ1人、チェロ2人、コントラバス1人、計25人の生徒さんとのツアーに同行しています。先生方、事務方も入れて総勢29名です。

彼らの本拠地オーブタというところで、4日間毎日10時から4時までストリングオーケストラのリハーサル、そのあと8時まで個人レッスンとつづき、最終日には、リスト室内管弦楽団の先生たち16人とリスト音楽院の生徒さんたち9人が一緒に弾いてくださる、すごいことになりそうです。

私はおみやげに、[ヴァイオリンデュオの楽譜]と[世界のメロディー日本の歌][日本の調べ]をしっかりと持ちました。

さあ、あと5時間でブタペストです。

この先はまたご報告させていただきます。

さて、教える仕事が多くなっている近年ですが、初めて教え始めたのは、私の弟が10歳離れていることで、10代の頃から彼のヴァイオリンを教えていたこともあり、かなり早い時期から教えるということをしていたように思います。正式には、大学1年生の時から仕事として教えているのでかれこれ？0年はたっています。

大学を卒業してからは師匠の海野義雄先生からご紹介された生徒さんたちも増え、今では生徒さんたちが日本はもちろん、世界中で活躍するようになっています。教えるというのはその生徒さんの人生そのものに関わることで、当たり前ですが、ものすごく責任重大です。一つのことを伝えるのに、そのことだけでなく、裏から言ってみたり、あの手この手を使って教えます。その責任が親にあることもあります(ヴァイオリンの場合高校生までレッスンに親御さんが付いてくることも多く)。あと家族関係にあたりもします。逆にそのことが身体の硬さ、バランスに影響していることもあり、本当にいろいろな角度から考えてアドバイスをしなくてははいけません。上手でも褒める時期ではないと思えば褒めないし、弾けてなくても上手と言ってみたり、百戦錬磨です。でも、大切なことはレッスンが終わって帰るとき、レッスン室を出るときに「次ががんばろう！いい時間だった！」と厳しくても楽しいレッスンだったとニコニコ

と納得して帰ることだと思います。本人の今一番持っている課題に対して、どのようにアプローチをしていくかが肝心です。

弾いているときは、身体の中身もみます。どのように力を使いバランスをとり、筋肉を使っているか等、まだまだ発見があります。私たちは力を抜いて歩いています。ですから、右手の弓も力を抜いて持ちましょう、とか、早いパッセージでは左指の力も抜いて、といますが、実際本当に力を抜いて歩いているのでしょうか？力を抜きすぎると、ふにゃふにゃで立てません。同じように手も抜きすぎると、確かに手や指の力は抜けていますが、腕や手首に力が入ったりします。最近はバランスではないかとも考えるようになってきています。抜くだけでも抜きすぎない。難しいですね。

大切なのは、思っている音を出すためにどのように身体を使って弾くか？ということだと最近思います。さあ 皆さん！身体を、筋肉を意識して動かしてみ、声を出して歌ってみませんか！

ムッシュ黒木の純正律講座 第44時限目 平均律普及の思想的背景について(33)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

前回、聖歌の響きが神の世界へと繋がっていること、そして $n/n+1$ という数比関係からなる音階の研究は神が創造した宇宙＝コスモスのハルモニアの原理の研究であった、という2つの思想を紹介した。

$n/n+1$ の音、例えば $2/3 = 5$ 度（ドーソ）などの響きのことを協和音という。つまりハモった音ということだ。そして、教会に鳴り響くきちんとハモった聖歌の響きの背後に、信徒は神の世界を見るのである。

もちろん、ここでは神がいるのか、あるいはいないのか、という議論はまったく行わない。神の存在が前提とされていて、神を理解することが最優先事項であった社会において、神の存在を問うても意味がないからである。重要なのはハモった歌声の向こうに信徒たちが神の存在を感じていた、という事実なのだ。つまりキリスト教徒にとっての此岸＝現世／彼岸＝神の国、という世界観があり、聖歌のハモりは聖体のパンと同じように、この二つの世界をつなぐ機能を有していたということだ。異教徒にとってみれば、ただの音響現象ではあるが、キリスト教徒の文化の中では神へのアクセスの手段という役割を担わされていたとも言える

さて、絵画史で見たように、19世紀末というのは芸術が神の表象から解放された時代である。かつては、絵画の向こうの神の存在が芸術としての絵画の価値を裏付けており、物質としての絵画はあくまでもその神を伝えるための媒体に、すなわち二次的な存在でしかなかった。対して、19世紀末以降、絵画の向こうの神ではなくあくまでも作品としての絵画自体に焦点を当てる芸術のあり方が主流となっていった。こうなると絵画の向こうのモデルに似ているか、ということより、造形としていかに面白い絵柄を描くかが重要となる。実は、モデルを参考にしつつもいかに対象に似ているかではなく絵柄の面

白さを追求した絵というのは、例えば日本絵画を見てもそう珍しいことではない。雪舟や蕪村の絵を見ても、本物そっくりというのではなく、なんとも言えない味のある画風を醸し出しているのがわかるだろう。対して、西洋の前衛画の場合、作品の向こう側にいる神の存在を否定しようとする意識が強すぎたのか、とうとうモデルを設定しない抽象画までもが出現した。

音楽の場合はどうか？ かつてのように音響の背後に神の存在を感じていた時には、協和音は神が宇宙を創造した際のハルモニアの原理の象徴として特権的な地位を与えられていた。ところが、19世紀末以降はあくまでも様々な和音のうちの一つとなった。確かにハモるという現象は、物理学的に説明することはできる。しかしそれはあくまでも現象の説明にしか過ぎない。つまり協和音が不協和音に対して優れているという説明にはならないのだ。そして協和音の響きが不協和音よりも美しいというのは、あくまでも聞き手の側の趣味判断の問題でしかなくなる。こうなると、それまで不適切とされてきた不協和音と適切とされてきた協和音の区別をなくし、それまでは禁止されてきた語法すらも駆使して新たな音楽を作り上げよう、という動きが出てくることになる。この新たな表現を追求しようという姿勢こそが、19世紀末以降の最先端の音楽を支える思想になったのだ。それどころか、それまで神のシンボルとして特権的位置にあった協和音は、神への否定意識から逆に不遇な扱いを受けることさえあったのである。こうして前衛を名乗る現代音楽が勢力を伸ばしていくこととなった。

ここには此岸＝現生／彼岸＝神の国という世界観、つまりシンボリズムの失墜が深く作用したと言えるだろう。

連続エッセイ【外科医のうたた寝】第35話純 正律の子守唄

純正律音楽研究会理事

福田六花（シンガー・ランニング・ドクター）

今年の3月に子どもが生まれました。しかも双子（男女）です。半世紀生きてきて初めて授かった子どもの世話で、愉しくも慌ただしい日々を過ごしています。

生まれてきたばかりの子どもたちに、どんな音楽を聴かせるのか？ 穏やかに過ごしてもらいたいとの思いから、我が家では当然純正律です。

子どもたちが生まれてすぐ、玉木宏樹さんが遺した200曲を越える純正律で奏でられた楽曲の中から、穏やかで優しい曲を13曲選び、曲順も十分に検討して1枚のCDを作りました。このCDを広島に“里帰り出産”していた妻の許に届け、毎晩子どもたちが眠る前に聴かせてもらうよう頼みました。

数日して妻から連絡が入りました。

「純正律を聴かせると、子どもたちはピタッと泣き止んで爆睡するよ。」

6月になり妻と2人の子どもが河口湖（山梨県）のわが家に帰ってきて、新しい生活が始まりました。

陽光で明るい昼間のリビングでは、Carole Kingの歌う陽気な「チキンスープのバラード」をBGMに、子どもたちは元気にミルクを飲み、大きな声を上げて泣き、大暴れの毎日です。

夜になると僕たちの暮らす湖畔の家は、静寂と暗闇に包まれます。20時過ぎにミルクを飲ませてから、子どもたちをベビーベッドに寝かせます。ベッドルームの片隅に置いたCDプレイヤーからは、かすかに聴こえる程度に純正律音楽が流れています。

純正律を子守唄にして、夜明けの鳥が鳴き出すまで、子どもたちはグッスリ眠ります。ふたりとも夜泣き知らずです。

今まで色々なところで純正律音楽の持つ癒し効果について、書いたり話したりしてきましたが、改めて素晴らしさにびっくりし、感謝する毎日です。

* 赤ちゃんの夜泣きが大変と云うハナシは非常に良く聴きます。純正律音楽はこうした育児の悩みの救う、福音になるでしょう。

やわらかいスピーカー エンクロージャーの発明

純正律音楽研究会 正会員
菅 順一（株式会社エンサウンド 代表取締役）

スピーカーと云えば、どのようなイメージを思い浮かべるでしょう？

わたしの場合、このスピーカーを発明するまで、硬い、重い、冷たい箱というイメージでした。それが今では大きく覆され、正反対に柔らかい、軽い、温もりがある、肉体のようなものがスピーカーの本来の姿なのだと思うように至ったのです。

このやわらかいボディのスピーカーシステムのことを、ソフトエンクロージャースピーカーと名付けました。今までのスピーカーエンクロージャーは硬いからハードエンクロージャースピーカーという名前を付けました。

はじめまして、純正律音楽研究会に入会して初投稿になります。今回はそのソフトエンクロージャースピーカーの誕生についてご紹介させていただこうと思います。

わたしは愛媛県松山市生まれ、子供の頃は発明家を志していました。愛媛県立松山工業高校を卒業後、大阪の大学に推薦入学しましたが、退屈な学園生活に1年で中退。その後数々の職業を経験した後に、飲食店を始めたいと思い、手打ちうどんの店「踊るうどん永木」という、うどん店を始めました。永木（ながき）というのは旧姓です。今は妻と子供が3人いて、家族5人で岩手県盛岡市に暮らしています。

スピーカーに興味を持ったのは、お店で一日中仕事をする訳ですから、自分のためにもお客様のためにもBGMを良くしようと15万円程度のステレオを

店舗に置き、主に Jazz を聞いておりました。

あるとき、たまご型のタイムドメインスピーカーを知り、PC スピーカーくらいの小さなスピーカーなのに美しい音色でとても気に入りました。そしてより大型の円筒形スピーカーYoshii9（ヨシイ 9）を購入しました。それは灰色の煙突が 2 本立っているような変わった形のスピーカーです。上向きに音が出ており、無指向性で包み込まれるような音色が特徴です。それからさらにクラシック音楽などにもはまることになったのです。

そしてそのスピーカーを使って、公民館で自由気ままに踊るスピリットダンスの会を行うようになりました。

次第に Yoshii9 では音量不足を感じるようになり（仕方がありません、8 cm 口径のスピーカーですから）、自分でそれを真似して作ってみようと思ったのでした。

平成 20 年 2 月のことです。初めは新聞やインターネットで見た塩化ビニールの水道管パイプを用いて作りましたが、筒が響いてしまい、思った音色にはなりません。中に吸音材を入れていなかったために、当然な結果ではあるのですが、どうしたものか・・・と、ふと足元を見たとき、いつも使っているヨガマットがありました。

試しに面白がって、ヨガマットを巻いて筒状にして、スピーカーユニットを乗せてみました。

すると、それまで聴いたことのないような、自然なやさしい音色が鳴り響いたのです。これが一番はじめに産まれた、ただヨガマットを丸めただけのスピーカーです。ありえないほどシンプルな作りですが、これでも、驚きの音が出たのです。初めて聞いたとき、思わず「あり得ない」と言い、何度も自分の耳を疑ったのでした。

様々な人に聞いてもらっているうちに、音の良さが認められ「これは大変な発明だから特許にすべきだ」と何人もの人に言われるようになります。

オーディオに詳しい人は、音を聞くまでは「絨毯だから音が吸収されて響かないでしょ」「音が籠るんじゃないか」と、半信半疑どころか、はじめから聞く気がないような感じでした。

ところが、聴いてみると「まさに目からうろこ」「何故これがいままで無かったのかわからない・・・」「いままで自分で作ってきたものは何だったんだ！！」

ということになるのです。特許を申請することについて、少し悩みました。はじめは特許にせずに公開しようとも思っていました。

だって、なんの努力も投資もせずに、天から落ちてきたような発明だったのですから。インドのヨガ聖者の本も読んでおりましたが、そのなかで、数千年前のインドの学術書には、すばらしい研究の本でも著者名が書かれていない。

特許という考えが無かった時代。全ての技は神から与えられたものだから、

自分の所有物にしてはならんというような考えがあったのです。わたしはヨガ聖者パラマハンサ・ヨガナンダに習って、瞑想の中で「神様、わたしはあなたの手足となり、自分を世の中のために役立てて欲しい。」と願ったこともあったのです。

ところが、当時従業員として働いていた方がある朝、「わたし特許とるのが夢だったのよ」その一言で、特許を申請することを決めました。その後、不思議なことが度々ありました。

自分でその後特許を書き上げ、提出日となりました。本来なら弁理士にお願いするところですが、なんだか面白半分に分自分で書きました。子供の頃の夢は発明家で、理数系は得意で、工業高校の知識が役に立ちました

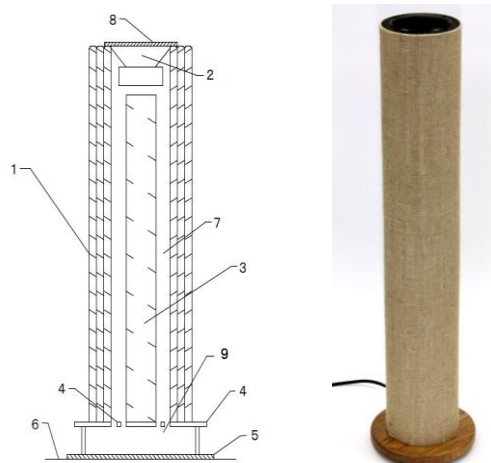
その提出日、また驚くことがあったのです。従業員が日めくりカレンダーをめくると「今日は耳の日よっ！」なんと3月3日だったのです。

しかも、女性の節句の日なのです、何故、それが驚きなのかというと今までのスピーカーは硬く、重く、黒く、角張って、まさに男性性そのもの！だったのです。この生まれでた柔らかいスピーカーはボディが柔らかく、軽く、カラフル、丸く、音色も柔らかくと、女性そのものを示すスピーカーだったのです。1年の中で、この記念すべき耳の日、ひな祭りの日に特許申請できたことは、まるで神様に手助けしてもらっているような気にさえなるのです。

普通は、スピーカーの特許といえば、100年以上あるスピーカーの歴史の中で特許を取ることなどしっかり勉強して重箱の隅をつつかないととれないという、イメージがありますが、わたしの申請した特許は、シートを円筒に丸めてスピーカーをはめ込んだだけという、実にシンプルなものです。

似たものがあったても、ゴムホースにスピーカーを取り付けたものくらいでした。巻いてつくる事により、制作が容易で自由にサイズを変えられることもでき、実用性が高いのです。通常、特許は審査までに数年かかるのですが、特許の早期審査をお願いして審査を急いでもらいました。

すると、「こんな構造の似たものがある」というようなものが、特許庁から送られてきました。それに対して、新規性を訴えなくては、特許とは認められません。ところが、その似たものというのが、ちっとも似てないのです。しかし、反論するには専門知識が必要でしたので、弁理士にお願いし、無事に特許を取得することができたのでした。(特許第 4262291 号)



特許になったソフトエンクロージャーの構造

- 1 : エンクロージャー (円筒の絨毯) 2 : スピーカーユニット 3 : 吸音材
4 : 支持部材 5 : 吸音シート 6 : グランド
7 : 空洞部 8 : フランジ 9 : 開口部

特許が成立する前に、うどん屋は後継者に継承することができました。たとえ特許がとれなくても、この道を進んでゆきたいと思ったのです。

今はこの驚き、感動、安らぎの技術を、世の中に広めてゆくことが、使命だと感じています。その後、さらに改良を施し、音質アップと大型化をすることもできました。プロ演奏家やオーディオショーでも大変高い評価もいただくことができたのです。

ソフトエンクロージャーのメリット

- ①スピーカーユニットの直接振動ならびに、内部に放射される音によってエンクロージャーが共振振動しても、不要音の発生が極めて少ない。
- ②エンクロージャーが吸音素材で出来ており、音の反射も少ないため、定在波の発生もなく、内部に放射される音が効果的に吸音される。
- ③エンクロージャー内部の損失が高いため、不要な内部振動が発生しにくく、目的音以外の発生が抑えられる。
- ④部材同士の強固な固定が不要で、振動による構成部品同士の接触による雑音等の発生要因が少ない。
- ⑤製作・設計が容易であり、製作の時間が短い。

これらの理由により、従来のスピーカー装置より軽量、安価、及び高忠実度再生が可能となる。また、エンクロージャーの振動は立ち上がり特性と収束特性に優れており、後述する「体感音響システム」への応用がしやすい点なども、特徴として挙げられる。また、最大音量付近でも音割れが少なく、複数台設置してメインスピーカーとして舞台などの音響システムとしての利用も可能である。

『音を肌で感じられるスピーカー』



抱っこスピーカーHugMe

ソフトエンクロージャーのもう一つ大きな特徴に、エンクロージャーの振動があります。スピーカーは音を鳴らしているのみならず、このスピーカーのボ

ディは音により盛大にブルブルと震えています。その動きは振動板が動いているように、目で確認できる程です。その振動が、楽器そのものと同じ振動をしていることに気が付きました。

抱きしめて聞くと、自分が演奏者になったような非常に素晴らしい音楽体験をすることができるのです。

それに、耳の不自由な、ろう者が健聴になった気分音楽を楽しむということまでできてしまうという、信じられないようなことまでできているのです。

抱きしめることで、音楽をより深く味わうことができるようになりました。普通は体ごと深く音楽を感じようとすると、それなりのスピーカーシステムが必要になりますが、抱っこスピーカーなら、耳元で音が鳴るので音は小さくてすみ、近所迷惑にもならず、隣の人と楽しく会話しながら生演奏や大型スピーカーでしか味わえない感動を手元で味わえるのです。

これを用いた人の感想で多いのが、安眠できる。癒される。体が熱くなる。リズムが体に残る。よく聞こえる。自分が演奏している気分になれる。便利。持ち運びやすい。信じられない程音がよい。画期的。などです。

純正律と平均律の音の違いもはっきりと体感で分かります。

スピーカーはモノラルですが、そのほうが便利で、抱きしめやすく、楽器を持っているような体感も強いのです。

インターネットで販売もしており、大人気で購入される方はバラバラです。『プロ奏者（ミニライブでの使用）、聴覚障がい者、今までオーディオに全く関心の無かった女性、マイクを繋いで講演での拡声用、オーディオマニア、音楽療法関係者、医者、セラピスト等々』

この抱っこスピーカーは手作り教室も開催しており、TVでも何度か紹介されました。場所によっては半数以上の参加者が耳の聴こえない人達で、手話通訳者を介しながらスピーカー作りをしているという不思議な場面も当たり前になってきています。

今年9月には日本音響学会での発表があり、ようやく専門家の間でも認知が広まることと思ひ、ワクワクしております。

※「抱っこスピーカー」でネット検索されると、多くの情報があります。

※ホームページは「エンサウンド」で検索してください。

CD レビュー 純正茶寮
〈 Slag Tanz 〉
純正律音楽研究会理事 黒木朋興

Slag Tanz
MAGMA

レーベル : King International / Jazz Village / Seventh Records
ASIN: B00S930QIQ



最初に断っておくが、純正律モノの紹介ではない。

メンバーが友人でもある、フランスのジャズロックバンド MAGMA の新譜である。2015年6月の来日公演でも演奏された曲であり、新曲をスタジオでレコーディングしたアルバムということになる。ただし、ここ数年、ライブで断片を演奏しており、何度もライブ演奏を経ることによって、ようやくスタジオ録音に漕ぎ着けたというわけだ。そもそもクリスチャン・ヴァンデにとっての作曲は、机を前にして五線譜に書き上げるというものではなく、演奏を重ねながら徐々に仕上げていくものだ。また、一度レコーディングした曲といえど、決して完成形というわけではなく、ライブで取り上げる度にアレンジを変えていくことになる。

生前、玉木さんは、今の音楽の問題点は作曲家と演奏家が分離していることだ、それに対して自分はいくまでも自分が演奏するために曲を書いているのであり、作曲は演奏のために前段階の作業にすぎない、というようなことを飲みながらよく言っていたように記憶している。

その点、クリスチャン・ヴァンデにとっての作曲は、まさに自分が演奏するための前段階の作業であり、作曲家＝演奏家という理想が結実していると言える。更に言えば、MAGMA の場合、他のミュージシャンはともかくクリスチャン・ヴァンデのドラムは他のミュージシャンで替えが効かないのではないかと感じる。もちろん、彼の楽曲を譜面に起こすことはできるだろうし、録音物も残っている。しかし彼のドラムは彼以外には演奏不可能のように思うのだ。かつてインタビューをした折、クリスチャンは、ドラムは決してリズム楽器だとは思わない、と断言していた。シンバルといえど叩く位置や叩き方によって周波数が変わる、だからシンバルがメロディーを奏でられないとは思わない、と。しかし、となれば、クリスチャンのあのリズム感や音色は決して楽譜上には記し得ないということにもなる。

おそらく、玉木さんが純正律という言葉で求めていたこともそれと遠くないだろう。

明白かつ現在の危険

純正律音楽研究会 正会員
弁護士 齋藤昌男

1. 2015年1月7日に「預言者ムハンマド」の風刺画を出したフランスの週刊紙「シャルリー・エブド」編集部が襲撃され、十数人が亡くなった事を受けて、「表現の自由」が侵害されたとして、フランス中が愛国の感情に沸き立っており、「表現の自由」の権利が改めて如何なる権利であるのかが問われている。
2. 聞き慣れない言葉で恐縮であるが、今回のタイトル「明白かつ現在の危険」(clear and present danger) と言うのは、「表現の自由」の考え方に大きな影響を与えた極めて重要な法理であるので、紹介したい。
3. 表現の自由とは、言論や文書による思想表明の自由のほか、広く映画・テレビ・ラジオ・演劇などの自由や‘集団示威運動の自由’など、個人が外部に向かってその思想・主張・意思・感情などを表現する自由のことを言う。憲法21条はこれら「一切の表現の自由」を保障している。表現の自由の他に言論の自由と言う言葉もあるが、表現の自由と全く同じものと言って良い。
4. さてこの「表現の自由」にも明確な制限があったとした最初の裁判例として有名なものは、アメリカの裁判例であるが、1919年のシェンク事件の裁判例がある。アメリカ連邦最高裁判所のホームズ (O. W. Holmes) 判事が「すべての事件における問題は、使われた言葉が、連邦議会が阻止する権限を有する実質的害悪を惹き起こすであろう明白かつ現在の危険を生むような状況において、また、そのような性質をもつものとして、用いられたかどうかである」と判示したことに始まる。そして劇場での比喩が語られており、言論の自由を最も厚く保護したとしても、劇場で火事だと嘘を承知で叫び、パニックを惹起する者を保護しないであろう、としている。
5. ではわが国の最高裁判所はどうか。わが国の最高裁判所が抽象的な「公共の福祉」論によって言論規制を安易に合憲化する傾向、敢えて言えば裁判例による言論の保護が低次元にとどまってきた。しかし、わが国にも、この「明白かつ現在の危険」を取り入れた裁判例が全くない訳ではない。

(1) 事件名 破壊活動防止法違反

法廷名 岐阜地方裁判所

裁判年月日 昭和34年1月27日

掲載文献 判例時報第183号5頁

「言論等表現の自由を保障することは自由民主主義社会の存在そのものにとって不可欠のものであり、言論等表現の自由の最大限の保障の上に国家社会の自由闊達なる生活、文化の創造発展があり、専制政治の暴力的危険を排して民主政府、民主政治の平和にして繁栄ある進歩があると謂うことは何人も肯認する

ところであろう。而も人類の自由獲得の努力によつて得られ、幾多の試練に堪えて確立された言論等表現の自由の原理は、真実公正の言論は他の言論を沈黙圧伏せしめることによつて決して得られるものではなく、種々の思想が一般に容認さるべく互に十分に表明討論されることによつて虚偽謬見が暴露され人間の理性、善意に適つた言論があらわれ来たるという言論等表現の自由の自律性の最高度の尊重の上に立つのである。かかる自由民主主義社会の基調として憲法の保障する言論表現の自由の原理は必然的に、言論等表現の自由の制限禁圧せらるべきは具体的に明白な自由の濫用行為にしてその表現行動について公共の安全福祉に対し明らかな差迫つた危険を及ぼすことが予見される場合に限るという必要最小限度の原則を生み出すのである。」

(2) 事件名 公職選挙法違反被告事件

法廷名 東京地方裁判所

裁判年月日 昭和42年3月27日

掲載文献 判例タイムズ第206号200頁

判例時報493号72頁

「更に、言論の自由を事前に制限し、その違反行為に対し処罰しようとするためには、言論の自由の重要性に鑑み、これを不当に制約させないため、最小限度、言論の自由な行使により右のような重大な害悪が不可避免的に生ずるといふ緊張の切迫した危険があり、それを制限すること以外の方法でその発生を防止しえない場合であること（以下明白にして現在の危険という）を要するものと当裁判所は考える。言論の自由を制限すべき政策的合理性とか、言論のもつ危険性とかの存在のみでは右制限の根拠たりえない。

然らば、言論の自由を制限する規定であつて、その言論が一般的に右のような要件を充たさないようなものは違憲の立法というべく、そうはいえないときでも、構成要件として右の要件が前提として含まれていると理解した上適用される場合初めて合憲的である、といわなければならない。」

(3) 事件名 公職選挙法違反被告事件

法廷名 妙寺簡易裁判所

裁判年月日 昭和43年3月12日

掲載文献 判例時報512号76頁

「我が日本国憲法下にあつては、その21条に規定されている言論の自由が最も重要な基本的人権として尊重され、保障されるべきものであることは論をまたない。もちろん、これとても無制限の自由が認められているのではなく、合理的な制限を加える余地のあることは否定できないけれども、しかしながら言論の自由が民主主義社会において来たす役割の重要さからみて、言論の自由は単にそれから生ずる善悪の存在を理由に政策的にほしいままに制限することは許されず、言論の自由を制限しなければ、制限した場合に比して基本的人権の上により重大な害悪を生ずる危険がある場合で、しかもその危険の招来が不可避免的であり（危険の生ずることが明白であり）、またその危険が緊急の切迫したものである（危険が現在する）という要件を満たす場合、即ち、明白かつ現在の危険の存在する場合に限ってその制限に合理的な理由があり、憲法21条に違反しないものと解すべきであろう。そしてこの理は、言論の内容を制限する

場合のみに止まらず、戸別訪問の禁止のように言論の形式を制限する場合も同様であることは、言論の自由の制限は通常その内容よりも形式によってなされるものであって、またその方がむしろ効果的であることからしても当然といえる。」

6. このように「危険」の基準は、1940年代は表現の自由を強く擁護する機能を果たしたが、50年代に入ると、ソ連（現ロシア）とアメリカの厳しい対立、いわゆる東西冷戦体制の下で、合衆国政府の転覆を唱道することを共謀したとしてアメリカ共産党の幹部が起訴された事件（デニス判決）において、その本来の意味（切迫性の要件）が骨抜きにされ、「明白かつありうべき危険」（clear and probable danger）で足りるとされたため、もはや表現の自由を保護することはできないとか、「危険」のテストは死滅したとか、多くの学説の評するところとなった。事実、デニス判決以降、同類の事件で、本来の「危険」の基準はもちろん、デニス判決の「ありうべき危険」の基準すら用いられたものはない。（芦部 憲法学Ⅲ人権各論（1）415ページ）
- 「危険」の基準がホームズ＝ブランドイスによって精練され、40年代に表現の自由の「優越的地位」の理論と結びついて広く用いられるようになったときの具体的内容は、①ある表現行為（その価値ないし類型は問わない）が近い将来、ある実質的害悪を惹き起こす蓋然性が明白であること、②その実質的害悪がきわめて重大（extremely serious）であり、その重大な害悪の時間的な切迫性（imminence）の度合がきわめて高いこと、③当該規制手段が右の害悪を回避するのに必要不可欠なものであること、という三つの要件が論証されてはじめて、当該表現行為の規制が許される、とするものである。
- ①は「明白」（clear）の意味——それは必ずしも明確に定義づけされなかった——を、当時の判例に言う「言論の『蓋然的な効果』」という説示に従って言い換えたもの、③は表現内容に共通の原則である（ただし、②と併せて考えると、必要性の要件も厳しい）。（芦部 417ページ）
7. 要するに、ある言動が害悪発生「危険」があるかどうかは、それが発表されたさいの四囲の状況に左右されるところが多く、同じ言動でも状況のいかんにより、「危険」を含み有害とみる場合と無害安全とみる場合とがありうるという考え方に、ホームズの特徴がある。思うに、言論を発する者がこの四囲の状況（このなかで一番大きな比重を占めるのは——劇場の比喻から推測し得るように——聴き手に及ぼす効果であるだろう）をにらみ、それを利用して、害悪発生効果をねらおうという意図（計算）こそが、伝統的にコモンローがターゲットとしてきたものであったのだと思われる。（奥平康弘著「表現の自由を求めて」岩波書店発行 142ページ）はしている。

以上

遺作小説連続 4 回【またしてもモーツァルト】
第二回

玉木宏樹遺作

腑におちないながらも密かな期待を抱きつつ舞矢は八時五分前に病院についた。

鷹橋は緊張した面持ちで無言のまま舞矢を案内した。廊下を何度も曲がり、校庭のようなグラウンドを横切ったところに古い建物があつた。

病棟ではなく、何かの研究室のようである。地下へ通じる階段はいやな足音を響かせたが、その音を聞いたかのように、扉は向こうの方から開いた。

ドアを開けて現われた人物の顔に舞矢はドギモを抜かれた。

昔、よく安いバーなどでクリスマスなんかの時につけて遊んだ小道具、田中氏はちょうどそのお面にそっくりの顔をしていた。大きな赤鼻にみみずのような貧相なチョビひげを生やし、まん丸の白ぶち眼鏡をかけて、かん高いテノールの声で迫ってきた。

「先生、先生、ぼく、先生の大ファンなんですよ。こんなところでお逢いできるなんて、ほんとに嬉しいことです。いやあ、こんな言い方、先生には失礼ですよ、大ファンだから先生には嫌われたくないんですよ」

無口で堅物の、機械的人間を予想してただけにドギモを抜かれた舞矢が田中の鼻に見入っていると、彼はそれをコチョコチョとかいた。それが癖だとすると、あの鼻はますます華々しいものになるだろう。

「いやいや、おそばで拝見する先生は、やはり色男ですなあ、ずいぶんと泣いている人がいるんでしょなあ」

田中氏はまた鼻をかいた。

「いやだなあ、先生もぼくの鼻を気になさっているんでしょあ……、鼻の大きいやつはナニもでかいと言うけど、ぼくの場合、それほどでもないですよ。間違いでもいいからモテるんじゃないかと多少は期待してるんだけど、こればかりはサッパリですね」

年齢不詳だが話し方は二十代のようなものである。鷹橋は苦笑しながら、舞矢を部屋の中へ招き入れた。

奥行き十メートルほどの左側の壁には、種々雑多な本がつめこまれており、右側の整理棚には資料らしきファイルがぎっしり並んでいる。正面の奥は分厚いアコーデオンカーテンで仕切られていた。

お茶は出ないがといいながら、鷹橋は中央の応接セットに舞矢をすわらせた。

「こっちはほとんど歴史の本でね、あっちは実験のデータ集なんだ」

「実験というと、今までにも何人か」

「いやいや変なことは心配しなくてもいい。今まで全く二人きりでやってきたんだ。色々考えたすえ、君にも参加してもらおうと思ったわけさ」

「正確には我々二人だけじゃなく」と田中。

「そうそう、きのう君にも話したあの二人の患者ねえ、彼らにも実験したけど、結果は明白だよ。あの二人の人格性はその時代そのものなんだから。それ以外のものは何一つでてきやしない」

「じゃあ、その実験と言うのは、過去に遡ることなのかね」

「いやいや、実は単純なく過去>以上のものなんだよ。その辺のことは、田中君から説明してもらおう」

「ぼくは昼間、政府関係のコンピュータ技師をやってるんですよ」

田中は得意そうに鼻をかいた。

「ほんとは歴史関係でくいたかったんですけど、金にはなりませんしね、今じゃコンピュータ方面では最優秀といわれるようになりまして、ひまを盗んじゃコンピュータに歴史の分析をやらせてみたんです。すると、あまりにもばかばかしい矛盾が多すぎるんですよ。どう見ても誰かが作為的に情報操作をしてるようにしか思えないんです」

「たとえば古事記とか日本書紀のようにですか」

「極端に言えばそのとおりです。まさに歴史とは累々たる謀略の上に立っている蠟人形の死体のようなものです。そんなときある日、逆行睡眠で自分の前世に遡ったという本を読んだんです」

「例のインドの少女とか、その類ですか」

「そうです。その類です。インドの少女は有史以前の言葉をしゃべりましたよね」

「アメリカの婦人は自分のルーツをアイルランドだといったし」

「ルーツではなく、前世なんですよ-----、失礼、でもほとんどが作り話なんですよ、やっぱり」

「-----」

「でもその中には全否定はできない、あるていど信憑性の高い話があるんです。くわしくはこのデータファイルのなかにあるんですけど-----。

そこでぼくは必死になって、催眠術の勉強を始めたんです。そしてある日、鷹橋先生と出会って」

「田中君はこんな調子の面白い人物だから、つい気を許して、例の二人の話をしてしまったのさ、それが-----」

「それが運のつきで、この研究所というか、刑務所みたいなところに連れ込まれる羽目になったわけです」

こんどは鷹橋が頭をかいた。

「そろそろ実験の説明にしてくれないかな」

「では細かい方法論は省いて結論からいきますと、舞矢先生を催眠術にかけて、過去に遡っていただきます」

「ぼくの前世を探っても、モーツァルトにつながるとは思えないけどなあ」

「そうじゃないんです、先生、あなたは学生の時、ドイツ人に師事されたことがありますね」

「そうそう、フリードリッヒ・リヒター先生」

「まず舞矢先生の学生時代に戻って、そのリヒター先生に逢っていただきます。」

そしてこんどはリヒター先生に催眠をかけて、若いころに戻っていただきます。そうすれば必ず、ドイツにアタリをつけることができますね」

「ちょっと待って……。話はじつに簡単そうだけど、よくわからないなあ、リヒター先生が現実ここに現われるわけでもなし、だいいちぼくは催眠術なんて知らないし」

「大丈夫です。それは私がやります」

「どうもよくわからないが、そんなことができるのかなあ」

「あのカーテンの向こうに何かあると思いますか？ 実は強力なホログラフィ装置があるんです。舞矢先生のなかのリヒター先生は、そのヴァーチャル・リアリティ空間で映像化されます」

「ちょっと待ってください。そのヴァーチャル・リアリティって何なんです」

「人工現実とでも訳しますか。まあいわば一種の大掛かりなシミュレーション装置とでもいいでしょうか」

「でもそこに現われたリヒター先生は、たんなる映像であって、本人自身じゃないでしょう。その人に催眠術をかけるなんて」

「舞矢君、そこがこの田中君の天才的なところなんだよ。実はどんなに離れていても、その本物のリヒター先生にテレパシーが届くのさ」

「えっ！……、でも、もしそうだとすると、今リヒター先生がなにをやっておられるのか全然わからないし、危険なことじゃないのか」

「当然、本物の先生がリラックスなさってる状態でなければかかりません。多分時間がかかるけど根気よくリヒター先生に接触します。そしてリヒター先生の若いときの知人、そのまた知人たちをずっとたどってうまくモーツァルトの知人にまで遡るようにするんです。もちろん一日じゃ不可能ですけどね」

「リヒター先生はまだ元気だからテレパシーがかかるというのは理解できたとしても、先生の若いときの知人なんて死んでるだろうし、どうやって死人にテレパシーを送るんだろう」

「死んだ人は簡単なんですよ。わかりやすい例を出せば霊媒と言うのがありますよね。あれと似たようなことでいいんです」

「じゃあ君たちは、霊魂の不滅なんてのを信じているのかい」

「信じるかどうかは別として、それも我々の研究対象です」

「鷹橋、君はこの方法で誰かにあったことがあるのかい」

「ああ、何人かね。でもいう必要はないだろう」

「ふうん、すぐに信じろといわれてもなあ……。さっき、一日じゃ不可能だといったよね」

「はい」

「だけどリヒター先生は作曲家だし、その線をさぐっていけばモーツァルトの知り合いに逢うのは簡単じゃないのかなあ」

「いや舞矢君、それにはふたつ難しいことがある」と鷹橋。

「ひとつは、この逆行催眠は猛烈に体力を消耗するので、すぐさまその時代へ飛ぶというわけにはいかない。そしてもうひとつの問題はね、モーツァルトの知人ならば必ずモーツァルトにあっていろんな話をするだろう」

「だってそれが目的なんじゃないか」

「実はそれが大問題なんだよ」鷹橋は間をとるかのように座り直した。

「その知人というのは、実は君自身でもあるんだからね。モーツァルトと親しければ親しいほど、あつて話をすれば何らかの影響を与えてしまうだろう。それはひょっとしたら、歴史を書き替えてしまうかも知れない危険なことなんだよ。我々もまだ、歴史上の有名人物との直接接触はやっていないんだ」

「ですからね、舞矢先生」待ちかねていたように田中。

「先生は、早い話がモーツァルトの私生活を覗き見したいわけでしょ」

「歴史的デバガメかあ」

「ですから、覗き見くらいではモーツァルトになんの影響も及ぼさないような人物でないとまずいんですよ。たとえばすぐクビになった小間使とか、いきつけのバーの見習ボーイとかね」

想像を絶する内容に、舞矢はいささか混乱を来たしたが、鷹橋はかまわず彼の手を取り、体調を計りだした。

「うん、やっぱり君は作曲のことさえ考えなきゃ、カルテ真白の健康体だ」

カーテンを開けると右側にベッドがあり、左側にアクリル製で透明な円筒形の電話ボックスのようなものがあつた。それが、ヴァーチャル・ホログラフィ装置だといひながら鷹橋は舞矢をベッドに寝かせた。そしてお釜のようなものを頭にかぶせたが、そのお釜からはたくさんのコードがでていて、壁に埋めこまれたパネルに連結されていた。パネルの一方はまたホログラフィにつながっている。

田中はパネルの前に座り、話しかけた。

田中の非常にコミックな表情は、舞矢をリラックスさせるにはうってつけのものだった。

「さて舞矢先生、この装置にはあなたの逆行催眠で現われた人物がホログラフィ化されて出てきます。我々用のモニターでもあるわけです」

「それはどのていど実体化するのですか」

「実体化じゃないですよ、ホログラフィですから。でも言葉もあるし、感情もあるから、いわゆる人格としては実体化しているともいえますか」

「うまくいけばモーツァルトが現われるんですか」

「いえ、それはだめです。無理すればあなた自身がモーツァルトになることも可能でしょうけれど、あなたの今の状態ではだめです。きっとあなたはそのモーツァルトにしがみついてしまって、それになりきりたいと思うでしょう。それでは催眠状態が解けたときに大変なことになると思います。二重人格を引きずってしまって、きっとあなたは自分自身を取り戻せなくなってしまうでしょう-----。ではそろそろ実験にかかりますが、その前に一番大切なことをお聞きします」

「なんですか」

「あなたの知人、またその知人とたぐっていくわけですが、一番肝心なのは、その知人同士がどのていどの信頼関係にあつたかということなんです。心底から信頼しあつていれば映像化は簡単にできますが、そうじゃないとなかなかうまくいかないんです。そこでお聞きするんですが、舞矢先生は本当にリヒター先生を尊敬なさっていますか」

「それはもちろん、ぼくの父より尊敬してるくらいだけど、向こうがぼくのこ

とをどう思ってるかは自信がないね」

「それは多分大丈夫でしょう。やってみればすぐにわかることだし。それからひとつお願いがあります」

「なんですか」

「これからモーツァルトの知人関係にまで遡りますが、運よくあなたがその知人になれたとしてもですよ、絶対にモーツァルトには話しかけないでください。もし向こうから声をかけられたとしても答えずに逃げ出してください」

「もし話したりすると歴史上に変化が起きるとでも……」

「それは全くわかりません。なにも起こらないというのが当たり前の考え方ですが、とにかく万が一の危険性は避けるべきです。それと、私が戻れといったら絶対に逆らわないようにしてください。度をすごすと、あなたが現時点に戻ったとき、その人物の性格を引きずってしまい、人格残像というややこしい事態になりかねませんから」

「ほんものの精神病になってしまうのかしら」

「そうともいえます。ですから私には絶対に逆らわないでください。では楽にしてシャツとズボンのボタンを外してゆっくりしてください」

こうして実験は開始された。

舞矢は二十二の時点に戻り、リヒター先生と対面していた。

卒業作品のスコアを見てリヒター先生は絶賛し、なおかつ舞矢から日本人の感性および構築力を逆に教わったというような話をしているところである。ここで舞矢はリヒター先生に、過去の人生中で一番感激的だったことはなにかをたずねた。

リヒター先生は最初、ヴァイオリニストになるつもりだったらしい。十八の時にヴァイオリンの先生から、もっと大きくものを見るために作曲することを勧められた。それがリヒター先生にとっての人生の一大転機だったのである。

ここで鷹橋と田中は、やはり音楽上の人間関係をさぐるためには師弟関係を攻めていくことがいいだろうという方針を決めた。

そして、リヒター先生が十八の時、年代でいえば 1935 年にまで遡り、グレーナーというヴァイオリニストが映像化された。このヴァイオリニストは二十六の時にウィーンフィルの指揮者として有名だったブルメスターに出会っている。そこで実力を認められてゲバントハウスのサブコンサートマスターの席を紹介されたのであった。

お互いの信頼関係は予想以上に完全で、映像化はスムーズに実現していった。しかし、ブルメスター十三歳の時のピアノ教師、マヤコフスキーが映像化した時点で実験は道を外れてしまった。単純にドイツ人をさぐればいだろうという計算は外れ、映像化されたマヤコフスキーはポーランド人だった。おまけに、そのカロール・マヤコフスキーの恩師は父親だったのである。年代でいえば、父、ヘンリク・マヤコフスキーは 1812 年生まれであった。

実験の初日としては大成功だったが、舞矢の疲労は強く、二回目は三日後に延ばされた。

次の被験ではポーランドからウィーンへたどるまでに大分時間がかかったが、

それでも幸運にも 1750 年代のウィーンに遡ることができた。神童時代のモーツァルトに接しても今の舞矢にはあまり関係がなさそうなので、三十年ほど時代を戻し、うまく、1787 年のウィーンの楽壇人に接触することができた。しかしここからがじつに大変だったのだ。

さすがにモーツァルトは有名人らしく、王室管弦楽団とかオペラ歌手とかの誰もが彼を知っていた。ところがモーツァルトの演奏姿は何度も見ているが、作曲しているところを見たものはいなかった。無理して見ることのできる立場の人間は何人もいるけれども、そこで交わされるであろう直接的な会話は絶対に避けなければならない。いろいろ考えたすえ、同時代の音楽家との接触は期待薄という結論になった。またあらたに別方面からのアタックを考えることにして、二回目の被験は終わった。

依然、有名人ではあったが、1780 年代の終わり頃ともなれば、モーツァルトの評価は意外に低く、一瞬、遠くを見るような表情をする人が多かった。

三回目の被験でようやく適当な人物が見つかった。いまでは全く埋もれてしまった、あるオペラ作曲家の親友が、なんとモーツァルトのいきつけのレストランの支配人だったのである。色めきたって、その人物、ヴィルヘルム・ドレーゼケを映像化した。モーツァルトが死んで二年たったある日だった。

「モーツァルト？ ええ、うちにはよく来ましたよ。だけど好かんねえ、ああいう男は-----。

チビで陰気臭くてアバタだらけで、そのうえ、酒ぐせが悪いんですよ。美食家でもなくせに料理にはいつも文句タラタラ-----。それがこうじて死ぬ寸前にゃ、この料理には誰かが毒を盛っているなんていうものですからね、頭に来て叩きだしてやったことがありますよ。

それにほとんどツケで、現金を入れてくれないから、たまには払ってくれと言いますと、じゃ、ルーレットの資金を貸せって言うんですよ。冗談じゃないって本気で怒ると、しばらくして古い歌かなんぞの譜面の書きさしを持ってきて、おれはヴォルフガングだ、この譜面を売れば、こんな店の一軒や二軒、軽いもんだってわめくんですよ。わたしゃ、癩癩起こして目の前で破いてやったことがあります。

いま思えば、死んでからあんなに有名になるとは思わなかったんで、やっぱり取っときゃよかったかなあとは思いますがね-----。

だから晩年の私生活なんてホント、ひどいもんでしたよ。うちでもしょっちゅう夫婦喧嘩はやらかすし、借金取りには追いかけて回されたり、脅迫されたり-----。そうそう、あの先生、特に友達が悪かったねえ。本人、からっきし博才もないのにルーレットとバカラに凝っちゃってねえ。最後にゃ取り上げるものもないんで、悪友たちも敬遠してたようですよ。

私の知ってるモーツァルトってえのはそんな人物でして、だから作曲してるところなんてみたことないですよ。毎日飲んだくれて衰弱しちゃって-----。でもいまから考えれば、あれでも本人、ちゃんとした曲をかいてたんですね。人は見かけによらないとは言いますが、いくら死んでから有名になっても、本人にとっては気の毒なことですね」

あまりにも悲惨な話しである。

このまま続けると、舞矢の精神面に悪影響を与えかねないため、実験は中止せざるを得なかった。鷹橋は激しく実験の全面中止を申し立てたが、舞矢のたつでの願いで、アプローチをかえて続行することになった。

無作為に当時の人間に接しても、モーツァルトに好意を寄せる人を見つけることは難しそうだった。そこでこれまでの実験データは反古にして一から出直し、別の面からモーツァルトに尊敬を抱いている人間を探し出そうということになった。

時間をおいて何回か被験がおこなわれた。

こんどはおもに家族関係と恋愛関係に的をしぼり、種々の思考錯誤のすえ、有力な人物を発見した。1815年生まれ、ゲオルグ・ミュラー、なんでもその養父のカルル・ミュラーが、青年の時、モーツァルトに逢ったことをゲオルグに自慢していたそうである。

父のカルルも先祖代々のパン屋のせがれだったが、子供の時、コンサートで見たモーツァルトの即興演奏のすばらしさに魂を奪われ、自分も音楽家になることを夢見たらしい。しかし満足な音楽教育も受けられず、親からは家業を継ぐことを命ぜられ、青年時代、少し不良がかって、定職につかなかった時期があるという。

ただモーツァルトに対する憧れはやみがたく、なんとかモーツァルトに逢うことだけを目的にメッセンジャーボーイをやっていたことがあり、その折に何回かモーツァルトの家に入出入りして、二度ほど、直接モーツァルトに逢ったことがあるらしい。

これこそはうってつけの人物である。さっそくゲオルグを通してカルルは映像化された。

「ではお父さん。モーツァルトに逢われたころに戻ってください」

ゲオルグの映像は薄れ、しばらくして灰色の服を着た青年が現われた。

「あなたはいま何才ですか」ゲオルグこと田中。

「十七才です」カルルこと舞矢。

「モーツァルトに逢いに行くのですか」

「そうです。メッセンジャーボーイですから」

「内容はわかりますか」

「例によって借金の督促状ですよ。いま、モーツァルトさんの家の前まで来ました」

「どんな家ですか」

「ありふれた二階建の借家ですよ。どちらかというとい陰気くさいですね……。何度もお呼びしてるんですけど、誰もいないようです。でも鍵はかかっているの、いま家のなかに入りました」

「なかに入るのは初めてですか」

「そうです。いつもは奥さんのコンスタンツェさんか、ジュスマイヤーさんにメッセージを渡しているの、モーツァルトさんに直接逢ったこともありません」

「ジュスマイヤーってどういう人ですか」

「先生のお弟子さんで、貴重な友人です。最近先生は体の具合が悪いらしくて、

譜面もほとんど書けないんです。それでクサファー・ジュスマイヤーさんが時間の許すかぎり付きっきりで口述筆記をなさってるんです。

あっ……！臭い、臭い、まったくひどい匂いだ。先生はなんてどこに住んでんだろう、奥さんもいったい何をしてるんだろう」

ドキドキしながらカルルは家のなかに入ったが、あまりの悪臭にたまらず引き返そうとした。だいいち、もしここに奥さんやジュスマイヤー氏が帰ってきたらただではすまない。慌てて逃げ出そうとしたとき、二階から怒鳴り声が飛んできた。

「クサファー、クサファー、どこへ行ったんだ！早く来い」

苦しそうで悲痛な叫びである。病人をほったらかして二人は何をしているのだろう。

「おい、早く！どこにいるんだ」

モーツァルトの叫びにすい寄せられるように、ドキドキのカルルは二階に上がっていった。匂いはますます強力になってゆく。

部屋の扉を開けたとたん襲ってきた、あまりに激しい悪臭に、カルルは気が遠くなりそうだった。

「やっと来たか、クサファー、さあ続きだぞ」

悪臭の源は、見ると目が腐るほど激しく醜怪にただれ、膨満しきってベッドに臥っているモーツァルトの体から発しているのだった。顔はアバタだらけで鉛色、目の回りはドーナツのように腫れ上がって眼球はめりこんでおり、視線も定かではないようである。

「先生、ぼくはカルル・ミュラーと申しまして」

「なに！……何と言った、クサファーじゃないのか、何者だ、何の用だ」

「ただのメッセンジャーボーイでして、先生へのお便りを」

「馬鹿もの！それならコンスタンツェかクサファーに渡せばよい。ウソをつくな！」

「ウソではありません。どなたもいらっしやらないので帰ろうとしたら、先生のお声が聞こえました」

「馬鹿もの！グダグダと言いつするな、うーん、お前は見てしまったな、この私のひどい姿を……、そうだ、それを見にきたんだろう、はっきりせい、お前はフリーメースンの回しものだろう」

「とんでもない、違います」

「えーい、うるさい！こんな体になるまで毒を盛り付けたうえに、なお殺し屋を差し向けるのか、お前らは……。殺すなら殺せ！逃げも隠れもせん、ひと思いにやれ！」

興奮でゼーゼーと肩で息をしながらモーツァルトはうめき、観念したようであった。

「違います。先生、わかってください。殺し屋じゃありません、よく見てください」

「うん？そうじゃないとするとお前は……。ハハン、少し見えて来たぞ、殺し屋にしては貧相な姿、しかし、灰色の服を着ておる」

「ですからただのメッセンジャーボーイでして」

しばらく目を凝らしてカルルをにらみ続けていたモーツァルトは突然大声で泣きだした。

「そうか、お前は悪魔の使者だな、いずれこうなるとは思っていた。-----当然と言えば当然の報い、もう覚悟もできている。だがな、ほんの少しだけ時間をくれ、一月、いや一週間でもいい」

「セ、センセイ！ちがうんです」

「わかっている。お前は地獄から契約書をもってきたんだろう。だがな-----一週間でよい、このからだ、もう長くないことは承知している。だけど頭のなかではもう出来上がっているのだ。あとはクサファーに書いてもらうだけだ」

「なにをお書きで」

「馬鹿もの！何を言うか、レクイエムに決まっておるじゃないか、人を欺き続け、傲慢不遜であった報いは、いま受け続けている。地獄に落ちても仕方はない。だがな、このままでは死んでも死にきれない。こんどこそは私のためではなく、人のためでもない、悪魔のためでもない、誰のためでもない、私の中にかけるまでも残っている神性の証、無為無償の天国的音楽を書くんだ」

モーツァルトは激しく嗚咽し、しゃくりあげ、じつとりと汗ばんでいた。

カルルはしばし茫然と立ちすくんでいた。

「何だ、まだ用か、それともこんな願いも聞き入れてくれないのか」

「いえ、先生、封書をお届けにあがったんで」

「馬鹿もの！契約書ならその辺においとけ、サインはあとです。一週間後に、も一度出直してこい、行け！このクソツタレ、まだ行かないのか、えーい、もうどうなっても知らんぞ！」

モーツァルトは枕元の水差しを必死でつかみ、カルルに投げつけようとした。

「戻れ」の声が頭に充満し、水差しが当たる寸前にカルルの映像は消え、舞矢は現実に戻ったのである。

土壇場のギリギリを体験しただけに舞矢の疲労困憊の度は激しく、実験を続行するかどうかで三人の議論は対決した。

鷹橋は猛烈に反対した。

「舞矢君、君にはいったはずだ、モーツァルトとはしゃべっちゃいけないんだ。おかげでモーツァルトは君を誤認してレクイエムを書くことになってしまう。どうやら歴史をいじくってしまったようだ」

田中は、どっちつかずで困惑したり、ニヤっとしたりであるが、

「確かに困ったことになってしまいました。でも実際、モーツァルトはレクイエムを書いたんだし、実験の成果としてもこんなにうまくいくともおもわなかったんで-----、やめにするのは一向に構いませんが」と、どちらかといえば、心残りのようである。

当然のこととして舞矢は、激しく鷹橋に迫った。

「あと一步なんだよ、もう一回だけでいいんだ。あの悲惨なモーツァルトのサマに比べりゃぼくのノイローゼなんて、てんでお話しにならない。それは本当によくわかった。だからもう一回だけ、お願いだ。ほとんど直りかけてはいるけど、いま打ち切られてしまうと、あの悲惨さだけが甦ってきて、崇高さのかけらさえ見えないじゃないか。直るか、永久に駄目になるかの瀬戸際だよ-----。

こんなことで中止するくらいなら最初からやらなきゃよかったんだ」

険悪になりかけた雰囲気は慌てて田中が言った。

「まあまあ、私はどちらでもいいんですけど、あなたのからだが心配で」

「体なんかこの際どうでもいい。モーツァルトがいみじくもいった無為無償の天国的音楽、その出来あがる姿をほんの一瞬でも垣間見られれば、その瞬間に死んだっていいんだ」

「百歩譲って、それはいいとしましょう。だけどさきほど、鷹橋先生の歴史をいじくった云々の件はどうなります」

「昔、モーツァルトに関する本をたくさんよんだけどね、レクイエムの依頼者が誰なのかははっきりしてないはずだよ」

「いや舞矢君、それは違う。シュトゥパツハという貴族が自分の作曲だということにするためゴーストライターとしてモーツァルトに」

「その話しは知っているよ。だけど本当かどうかわかりやせん。死ぬ間際のモーツァルトのことなんか誰一人把握してないんだから。だいいち、本当に死んだのかね？ 死体を確認した奴が何処かにいるのかい？ それと、ただのメッセンジャーボーイを悪魔の使者と勘違いしたという話しもかなり有力じゃないか-----。

もしもだよ、そのなんとかという貴族がほんとの依頼者としても、モーツァルトも言っていたじゃないか、もう頭のなかではできてるってね。多分その仕事がいやでいやでしようがなかった時に、ちょうどそこへカルルが来たもんで、モーツァルトはその気になったんだと思う。これが絶筆になるということも瞬間に悟ったんだよ。だからこそ無為無償のって言ったんだと思うよ」

舞矢の脅し半分の必死の願いに鷹橋は屈し、あと一回限りということを確認し合って最後の実験を行なうことになった。

モーツァルトの約束に合わせ、一週間後にそれは行なわれた。

手際よくカルル・ミュラーは映像化された。コンスタンツェは瀕死の夫をほったらかしにしてほとんど家には寄り付かず、ジュスマイヤーとて始終つきっきりでもないのが、カルルが前のように忍び込むのは簡単なことであった。異様な匂いは前にもまして強くなっていて、まるで獣の死体置き場のようだった。

部屋をノックすると弱々しい声が反応した。

「クサファーかい、お入り」

またもやジュスマイヤーと勘違いしているが、カルルは黙って椅子に座った。

「さっそく始めよう、クサファー、ラクリモーサの終わりの方だ」

両のまぶたは前よりも腫れ上がり、もはや視力もないようで、いまや死の寸前といいきってもいいほど憔悴した姿であった。

「ティンパニはDの音を三拍うち鳴らす。そしてヴァイオリンはタラタララと上のFまで駆け上がり、バセットホルンは-----」

弱々しい口ぶりで、それでも最後の力をふりしぼるように口早にメロディを口ずさんでいたが、カルルは如何ともしがたく、その姿を見やっていた。

「さあコーラスは-----、あと何小節かな、クサファー、もう一度いままでのところを確認しよう、うたってくれ」

いわれても栓方なく、カルルは押し黙ってモーツァルトを眺めていた。

「どうしたんだ、おかしいぞ、クサファー。歌い方が悪かったのか、それとも、私はもう音程さえ取れなくなってるのか？」

「いえ先生、ぼくはクサファーではありません。この間のカルルです」

「なに、カルル-----、ううん、そうか、デモンの使者め、まだ早い、もうすぐ終わりだ、あと数小節だ、それすら待てないのか、せっかちものめ」

モーツァルトは必死の思いで上半身をもたげようとしていた。

「今日が最後の日であることくらいはわかっている。もう少しで終わりだというのになぜ待てないのだ、なんてお前は無慈悲なやつなんだ、出て行け！ 馬鹿もの！ 約束はたがわん、クサファーはどうした、ジュスマイヤーはどこだ」最後の力をふりしぼるがごとく、物凄い形相で上半身をもたげ、怒りと憎悪にまみれたその姿は鬼気迫るものがあった。

「出ていけと言うのがわからんのか！ クサファー！ こいつをつまみ出してくれ」

いま出ていかないと、本当に目の前で死んでしまうことを直感したカルルは逃げ出そうとした瞬間に階段からの慌ただしい足音に気づいた。

「先生、先生、どうしたんですか」

ジュスマイヤーは迫ってくる。モーツァルトはたち上がろうとし、なにかをわめきながら口から泡を吹き出した。

いまや絶対絶命、ジュスマイヤーがドアを開ける寸前だった。

逃げ場所のなくなったカルルは進退極まって、瀕死のモーツァルトにしがみついてしまった。と同時に舞矢は失神した姿で現在に戻った。その時驚いたことに、ホログラフィーはカルルの姿と入れ替わって、硬直したモーツァルトが現われたのであった。

「しまった。もっと前に戻すべきだった。とんでもない失敗だ。ホログラフィーは死体を映像化することはできないはずだが」

鷹橋と田中は慌てていろんな操作をしたが、死体は消えなかった。アクリルの覆いを取って、映像に触れてみると、なんとそれは固体化されたモーツァルトの死体であった。

時に 1991 年六月の初頭の頃である。

今後のスケジュール

【純正律音楽コンサート】

2015年10月23日金曜日 19時 開演

会場：長野県岡谷市文化会館 カノラホール

出演：水野佐知香(Vn.)、三宅美子(Hp.)、吉原佐知子(箏)

入場料：3,500円(会員特別価格3,000円)

2015年12月23日水曜日(祝日)

会場：新宿文化センター 小ホール

出演：水野佐知香(Vn.)、三宅美子(Hp.)、吉原佐知子(箏)

入場料：3,500円(会員特別価格3,000円)



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

<http://just-int.com/>

平成27年9月11日 発行責任者：NPO 法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫